

# 東京方言における動詞・形容詞の活用形のアクセント

柳 田 征 司

## 目次

- 一、問題の所在
- 二、二音節動詞
- 三、三音節四段活用動詞
- 四、三音節一段活用動詞
- 五、二音節形容詞
- 六、三音節形容詞
- 七、四音節形容詞
- 八、結論

## 一、問題の所在

筆者は、鎌倉・室町時代の間に音便が定着すると、二音節第二類四段活用動詞連用形十テ、三音節第二類四段活用動詞連用形十テ、第二類形容詞連体形において、特殊音節が単独でアクセントの山を担わざるをえなくなり、これが直接の原因となって、京阪式アクセントから東京式アクセントが分離したのではないかと推定している。<sup>(1)</sup> 今、二音節第二類

東京方言における動詞・形容詞の活用形のアクセント

四段活用動詞に例を取ると、「書<sub>キ</sub>テ」「読<sub>ミ</sub>テ」「打<sub>チ</sub>テ」の音便形「書<sub>イ</sub>テ」「読<sub>ン</sub>デ」「打<sub>ッ</sub>テ」が定着すると、特殊音節が単独でアクセントの山を担えない東京式アクセント地域では、アクセントの山を前へ移して、「書<sub>イ</sub>テ」「読<sub>ン</sub>デ」「打<sub>ッ</sub>テ」に変えざるをえなかつたものと考えられる。

この推定が妥当なものとして、次に検討されなくてはならないのは、東京式アクセントにおいて、第二类動詞の連用形と第二类形容詞の連体形に生じたこの変化が、他の活用形に影響を与えたと考えてよいかどうかということである。早く服部四郎博士は、連用形の「書<sub>イ</sub>タ」「読<sub>ン</sub>ダ」が終止連体形に影響を与えて「カク」「ヨム」になつたと推定されたが、<sup>(2)</sup>そのような変化が、広く動詞・形容詞の他の活用形の場合についても言えるかどうかということである。本稿は、この問題を取り上げて、現代東京方言を対象として、第二类動詞と第二类形容詞との各活用形のアクセントが、

①最初に変化が起きたと見られる、連用形(動詞の場合)または終止連体形(形容詞の場合)のアクセントと同じ形になつているかどうか、

②同じになつている場合には、別の原因によつて同じになつていないかどうか、

③同じになつていない場合には、同じにならなかつた別の原因が説明できるかどうか、

ということについて検討する。そのことによつて、第二类動詞連用形十テと第二类形容詞終止連体形とに生じたアクセントの変化が、東京方言における動詞と形容詞との活用形のアクセントを今日見るような形に導くことになつた可能性を認めようとする。

## 二、二音節動詞

鎌倉時代の京阪式アクセントにおける二音節動詞の各活用形のアクセントは表1のようであつたと推定されている。<sup>(3)</sup>また、現代東京方言のアクセントは表2の通りである。<sup>(4)</sup>

(表1) 鎌倉時代における二音節動詞のアクセント

類	終止形	連体形	連用形一	連用形二	已然形	未然形	特殊形
第一類	● ○	● ●	● ○	● ○	● ○	● ●	● ●
第二類	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ○

(表2) 現代東京方言における二音節動詞のアクセント

類	終止連体	連用形	仮定形	未然形	命令形
第一類	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●	○ ●
第二類	● ○	● ○	● ○	○ ●	● ○

二音節第二類動詞の場合、終止連体形・仮定形・命令形は、連用形に生じた●○と同じ形になっている。そして、これらの活用の場合も、鎌倉時代の京阪式アクセントの形から●○の形に変わらなくてはならない事情は考えにくい。従って、これらの活用のアクセントは、連用形に生じた形にひかれて生じたものではないかと推定される。已然形○●▽は、○●▽を経て、○●▽↓●○▽の変化と、○●↓●○の変化とにひかれて、仮定形●○▽になったと見られる。命令形は、鎌倉時代の形が明らかでないけれども、連用形と同じアクセントと見られるところからすると、ここでも連用形の形にひかれて変化したものと推定される。

なお、このようにして生じた第二類の終止連体形●○は、第一類の終止連体形が●●であったから、これと衝突することはなかった。また、連用形+テの場合も、第一類が、●○▽から●●▽↓○●▽と転じていったから、第二類の新しい形●○▽はそれと衝突することはなかった。そして、この二つの活用形において区別できていたから、他の活用形も混乱しなかったものと推定される。

問題は、連用形の形と異なる形をしている例で、二つの場合がある。その一つは未然形「ン・ナイ・ウ」の場合である。カカ<sup>1</sup>ン（書かん）・カカ<sup>2</sup>ナイ（書かない）・カコ<sup>3</sup>ー（書こう）などは●○でなく○●となつてゐる。打消の助動詞「ン（ぬ）」<sup>(7)</sup>と推量の助動詞「ウ（む）」がつく形は、特殊形と呼ばれる形であるから、鎌倉時代のアクセントはともに○●▼であつたと見られる。打消の助動詞「ン」と推量の助動詞「ウ」とは陳述性の高い助動詞で、その後には他の要素を接続させることなく、その形で終止することが多い。そのため、「ヌ」「ム」の形で行われている間は、○●▼のアクセントを維持できても、それらが特殊音節「ン」「ウ」になると、単独でアクセントの山を担うことのできない東京式アクセント地域においては、直前の音節に山を移して、

○●▼↓●●▼

とせざるをえなくなつたのではないか。二音節第二類動詞のアクセントが○●から●○に変わった動きにひかれ、また、低明示のための直前音節の隆起<sup>(8)</sup>が起きると、「書カ<sup>8</sup>ン」「書コ<sup>9</sup>ー」のアクセントも、

○●▼↓●●▼

の形になる動きもあつたものと見られるが、この場合、反する二つの方向の変化が相克し、前者の力がまさつたものと推定される。前者が直接的な原因であるのに対して、後者の一つがひかれて起きる二次的な原因であり、もう一つもさほど大きくない力であつたからである。

打消の助動詞「ナイ」は京阪式アクセント地域では行われなかつた形であるから、その古い時代のアクセントが明らかでなく、従つて、現代東京方言の形が○●▼▼（カカ<sup>1</sup>ナイ）である事情はよくわからない。<sup>(9)</sup>

もう一つ、●○になつてゐない例に、「書キマス」(○●●▼▼)など、連用形+マスの場合がある。「マス」の語源は「マキラス」(マラス)であるから、動詞の活用形は連用形第一種であつて、その鎌倉時代のアクセントは、○●…の形の複合動詞であつたと見られる。その低くはじまる形が東京アクセントでもとどまつてゐるのであろう。

### 三、三音節四段活用動詞

三音節第二類四段活用動詞十テの場合にも、○○●●▽の形が音便の定着により○○●●○▽に転じたものと推定される<sup>⑩</sup>。この場合にも、連用形に生じた形は他の活用形に影響を与えているであろうか。

鎌倉時代における三音節第二類四段活用動詞の各活用形のアクセントは表3のようであったと推定されている。<sup>⑪</sup>

(表3) 鎌倉時代における三音節第二類四段活用動詞のアクセント

第二類	類	終止形	連体形	連用形一	連用形二	已然形	未然形	特殊形
		○○●	○○●	○○●●	○○●●	○○●●	○○●●	○○●●

また、現代東京方言のアクセントは表4の通りである。

(表4) 現代東京方言における三音節第二類四段活用動詞のアクセント

第二類	類	終止連体	連用形	仮定形	未然形	命令形
		○○●○○	○○●○○	○○●○○	○○●●●	○○●○○

ここでも、未然形の「くナイ」「くウ」と連用形+マスの形とを除いて、他の活用形は、連用形に生じた○○●●○と同一形になっている。そして、そのような変化が起きる原因は連用形からの影響のほかには考えにくい。ここでも、連用形+テに生じた○○●●▽↓○○●●○▽にひかれて、変化が起きたものと解される。

連用形とは異なる形となっているところの未然形十ウ、例えば、ウゴカウ(動かう)などの、鎌倉時代のアクセントは、特殊形十ウで、○○●●▽であった。そして、特殊音節「ウ」が単独でアクセントの山を担えない東京方言においては、

山が一つ前に移り、○○●●▽となった。この形が統成的機能を果たす形に整えられたのが、○●●▽なのであろう。この場合も「ナイ」については明らかでない。連用形+マスについては、連用形第一種○○●●+マ(イ)ラスの複合語のアクセントがとどまっているのであろう。連用形にひかれるよりも、それらの原因の方が強く働いたものと見られる。

あわせて三音節第一類動詞と第三類動詞とを見ておく。鎌倉時代における両類動詞の活用形のアクセントは表5のようであったと推定されている。<sup>(13)</sup>

(表5) 鎌倉時代における三音節第一・第三類四段動詞のアクセント

類	終止形	連体形	連用形一	連用形二	已然形	未然形	特殊形
第一類	●●○	●●●	●●○	●●○	●●○	●●●	●●●
第三類	○●○	○●●	○●○	○●○	○●○	○●●	○○○

また、現代東京方言のアクセントは表6の通りである。

(表6) 現代東京方言における三音節第一・第三類四段動詞のアクセント

類	終止連体	連用形	仮定形	未然形	命令形
第一類	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
第三類	○●○	○●○	○●○	○●●	○●○

第一類動詞は、語頭に●●が連続するケースに語頭の低下または山の後退が起きたものと説明することができる。第三類動詞は、アクセント変化の結果近づいて来た第二類動詞に合流することになったものと見られる。

#### 四、三音節一段活用動詞

三音節第一類・第二類一段活用動詞の鎌倉時代のアクセントは表7のようであったと推定されている。<sup>(13)</sup>

(表7) 鎌倉時代における三音節一段活用動詞のアクセント

類	終止形	連体形	連用形一	連用形二	已然形	未然形	特殊形
第一類	●○	●●●	●○	●○	●●●○	●●	●●
第二類	○●	○○●	○●	○●	○○●○	○●	○○

また、現代東京方言のアクセントは表8の通りである。

(表8) 現代東京方言における三音節一段活用動詞のアクセント

類	終止連体	連用形	仮定形	未然形	命令形
第一類	○●●	○●	○●●	○●	○●●●○●●
第二類	○●○	●○	○●●○	○●	○●●●●○●○

第二類動詞の連用形は、連用形十テのアクセント○●▽が○●●▽に転じ、これが第二類四段動詞における○●▽↓●○▽の変化にひかれて、●○▽に転じたのであろう。

この動詞の場合には、そのようにして生まれた連用形の形とそれ以外の活用形(ただし命令形の一部を除く)の形とが異なっている。これはどのような事情によるのであろうか。終止連体形の○●●は、三音節第二類動詞(動くなど)に生じた○●●↓○●●の変化にひかれたものであろう。未然形は「くナイ」と「くウ」の形である。前者については明らか

でないが、後者は、○○+(▼)の▼が特殊音節であるために○●(▼)に変わったのであろう。助動詞「ウ」から「ヨウ」が生まれると、その形は○●(▼▼)で実現したのであろう。残るのは仮定形であるが、○●○(▼)の形は安定した形であったから変化しないでそのままとどまったのであろう。三音節一段活用動詞の場合には、音便を起さなかつたから、その連用形+テのアクセントも○●▼↓●○▼の変化を遂げる必要がなく、二音節第二類四段活用動詞に起きた変化にひかれて●○▼に変わったものであったから、他の活用形に及ぼす影響力が弱かつたものと考えられる。そのため、ここでは、それぞれの活用形に別の原因による変化が発現しているものと見られる。

なお、第一類動詞の場合は、終止連体形・仮定形・未然形には語頭低下または山の後退が起きている。連用形は、それらの諸活用形の形にひかれて変わったものであろう。

### 五、二音節形容詞

次に形容詞の活用形のアクセントを見る。鎌倉時代における二音節形容詞の各活用形のアクセントは表9のようであったと推定されている。<sup>(14)</sup>

(表9) 鎌倉時代における二音節形容詞のアクセント

類	終止形	連用形	連体形	已然形	未然形
第一類	●○	●○	●○	●●○	●●○
第二類	○●	●○	○●	○●○	●○○

現代東京方言では、この二類の別がなく、そのアクセントは表10の通りである。



(表10) 現代東京方言における二音節形容詞のアクセント

類	終止連体	連用形	仮定形	未然形
	● ○	● ○	● ○ ○	○ ● ●

連体形の音便が定着すると、東京式アクセント地域においては、第二類形容詞の連体形○●は●○に変わらざるを得なかつたと見られる。<sup>(15)</sup>

そのようにして生まれた新しい終止連体形のアクセント●○と、連用形・仮定形のアクセントとは一致している。連用形の場合、○●は強調の表現であるために、上昇調が低の前で許されたが、それでも、その形は、単独でアクセントの山を担うかたちであるから、●○に変化しやすい形であった。また、已然形の○●○●は、○●○↓●○○の変化にひかれたことが考えられる。この二つの活用形の場合には、それぞれの活用形がもった変化の原因による変化の方向と、終止連体形にひかれるという変化の方向とが一致して実現した形なのである。

新しく生じた終止連体形のアクセントと異なるのは未然形である。未然形は、形容詞連用形+アラ(ウ)であるから、形容詞連用形○●に、アラム○○(▼)が転じた○●(▼)(アラウ)が複合して、

○●+○○●(▼)↓●●●(▼)

となり、それが統成的機能を獲得して、○●●(▼)となったものであろう。東京アクセントでは、連用形のかり活用、例えば「ヨカッタ」もク活用の形容詞と同じく語頭が高く、●○○(▼)である。同じかり活用でありながら、未然形の「ヨカロー」(○●●●(▼))とどうして形が違うのであろうか。これは、京阪式アクセントのそれが、

○●+○○●(▼)(ヨク+アッタ)

という連続で、構造は「ヨカロー」と同じであるが、こちらの方は「ヨクハアッタ」などの形も多用され、○●○の独立

性が強かったために、この部分に●○の変化が起きたのであろう。

あわせて第一類形容詞を見ておく。連用形●○は安定した形であった。終止連体形の●●は統成的機能をもつ方向に変化して●○となったものであろう。已然形の●●○(▽)は、語頭低下が起きてよいところであるが、連用形と終止連体形において第二類形容詞と一致してしまったために、この形も、第二類形容詞と同じ形になって、統成的機能を果たす形となったのであろう。未然形の●○○は、第二類に起きたのと同じことが起きたと見られるが、また、第二類形容詞に合流したという面も強かったものと考えられる。

### 六、三音節形容詞

鎌倉時代における三音節形容詞の各活用形のアクセントは表11のようであったと推定されている。<sup>(16)</sup>

(表11) 鎌倉時代における三音節形容詞のアクセント

類	終止形	連用形	連体形	已然形	未然形
第一類	●●● ●●○	●●● ●○	●●● ●●● ●●○	●●● ●●● ●○	●●● ●●○ ○○
第二類	○○●	○○● ○○	○○● ○○○ ○○●	○○● ○○● ○○○	○○● ○○○ ○○○

また、現代東京方言のそのアクセントは表12の通りである。

筆者の解釈では、第二類形容詞終止連体形の○○●が、音便の定着によって○○●○に変わらざるをえなかったと考えられる。

しかし、三音節の形容詞の場合には、その○○●○の形が他の活用形に影響を与えていない。三音節形容詞の場合にはどのような変化が起きたのであろうか。形容詞の場合、変化は終止連体形に起きたから、連用形に起きた動詞の場合と

(表12) 現代東京方言における三音節形容詞のアクセント

類	終止連体	連用形	仮定形	未然形
第一類	○●●	○●●	○●●	○●●
第二類	○●○	●○○	●○○	○●●

比べて他の活用形に及ぼす影響力は小さかったものと見られる。そのため、各活用形は、それぞれにかかえた事情から独自に変化したのではないか。まず、連用形は、二音節第二類動詞十テに生じた○●○↓●○○の変化の動きにひかれて、転じたのであろう。次に仮定形は、低明示のための直前音節の隆起が起きて、○○●○↓●○○○の変化を生じたのであろう。また未然形は、形容詞連用形+アラ(ウ)であるから、形容詞連用形○●○○に、アラム○○(▼)が転じた○●(▼)(アラ(ウ))が複合して、

○●○○+○○(▼)↓○○●●(▼)

となったものであろう。東京式アクセントでは、連用形のカリ活用形、例えば「シロカッタ」も、ク活用形容詞と同じく語頭が高く、●○○○(▼)である。同じカリ活用でありながら、未然形の「シロカロー」(○●●●(▼))とどうして形が違うのであろうか。これは、京阪式アクセントのそれが、

○●○○+○○(▼)(白ク+アッタ)

という連続で、構造は「シロカロー」と同じであるが、こちらの方は「白クハアッタ」などの形も多用され、○●○○の独立性が強かったために、この部分に●○○への変化が起きたのであろう。

右のようにして、東京アクセントの各活用形のアクセントが定まったものと見られるのであるが、『明解日本語アクセント辞典第二版』(解説四九頁)によれば、近年の若い層の東京アクセントでは、次のような形が行われているという。

連用形

白ク

●●〇〇

白カツ(夕)

●●〇〇(▽)

仮定形

白ケレ(バ)

〇●〇〇(▽)

類推によって、各活用形が○●●に統一されようとしている動きを見る。

あわせて第一類形容詞を見ておく。連用形と終止連体形とは語頭の●●に山の後退が起きたものと見られる。仮定形が○●●であるのは簡単には説明しにくい。その原形已然形の鎌倉時代におけるアクセントは●●●○(▽)と推定されてお<sup>17)</sup>り、この形が語頭低下または山の後退を起こすと、○●●○(▽)か○●●●(▽)かであって、○●●○ではないからである。この変化を説明する上で注目されるのは、第二類の形容詞の活用形の中で、●●○○の形をしている活用形に、

シ|ロクテ・シ|ロカッタ・シ|ロケレバ

があることではないか。第一類の方も、右の三つの形は、

アカ|クテ・アカ|カッタ・アカ|ケレバ

と同じ形になっているのである。アカクテは、●●○+▼が結合度を強くして●●○▽となった形に語頭低下が起きて○●○▽となったものであろう。アカカッタは、

●●○+○●●(▽)

の●●○の部分の独立性があり、そのために●●○(▽)となり、この形にやはり語頭低下が起きたのであろう。アカケレバは、そのアカクテ・アカカッタのアクセントにひかれたものではないかと考える。未然形、例えば「アカカロー」は、●●○+○●●(▽)が●●●○+○●●(▽)に変わり、これが結合度を強くし、あわせて語頭低下が起きて、○●●●(▽)になったものであろう。

## 七、四音節形容詞

次に四音節形容詞を見る。鎌倉時代のアクセントは表13のようであったと推定されている。<sup>(18)</sup>

(表13) 鎌倉時代における四音節形容詞のアクセント

類	終止形	連用形	連体形	已然形	未然形
第一類	●●●● ●●●○	●●●○	●●●● ●●●○	●●●● ●●●○	●●●○ ●●○○
第二類	○○○○ ●○○○	○○●○	○○○○ ○○○○	○○○○ ○○○○	○○○○ ○○○○

また、現代東京方言のアクセントは表14の通りである。

(表14) 現代東京方言における四音節形容詞のアクセント

類	終止連体	連用形	仮定形	未然形
第一類	○○●● ●●●●	○○●● ●●●●	○○●● ●●●○	○○●● ●●●●
第二類	○○●● ●●○○	○○●● ○○○○	○○●● ○○○○	○○●● ●●●●

第二類形容詞の終止連体形は、既に見たように○○○○の形から、音便の定着により○○●●の形に転じ、統成的機能を果たす動きの中で○○●●になったものと推定される。

この形容詞の場合、終止連体形に生じた新しい形○○●●が他の活用形に影響を与えていない。この場合も、根底に新しい形が生まれた活用形が終止連体形で影響力が小さかったことがあり、それぞれの活用形がもった原因の方が強く働いたものと見られる。連用形は、音便の定着によって、三音節第二類動詞十テのアクセント○○●●が○○●●に転

じたのにひかれた変化と見られる。次に、仮定形は、低明示のための直前音節の隆起によって、○○○●○から○○○  
○○○に転じたものであろう、未然形については、三音節形容詞の場合と同様に考えられる。即ち、未然形は、連用形＋  
アラ(ウ)であるから、

○●●○＋○○●●(▽) ↓ ○●●●●●(▽)

となったものと考えられる。「くカット」の形○○●○○○○(▽)については、三音節形容詞の場合に準じて説明すること  
ができる。

右のようにして、東京アクセントの各活用形のアクセントが定まったものとみられるのであるが、『明解日本語アクセ  
ント辞典第二版』(解説四九頁)によれば、近年の若い層の東京アクセントでは、次のような形が行われているという。

連用形 短ク ○●●○○

短カツ(タ) ○●●○○(▽)

仮定形 短ケレ(バ) ○●●○○(▽)

類推によって、各活用形が○●●○に統一されようとしている動きを見る。

あわせて第一類形容詞を見ておく。終止連体形と連用形とは、語頭の●●に山の後退が起きたものである。仮定形と  
未然形とは、三音節第一類形容詞の場合に準じて説明することができる。

## 八、結論

現代東京方言における動詞・形容詞の活用形のアクセントが、活用形間でどのくらい一致しているかをまとめてみる  
と、表15のようになっている。語幹の範囲と活用語尾を含めた全体とに分けて示した。動詞の場合は連用形の形(くマス  
の形を除く)、形容詞の場合は終止連体形の形を、それぞれ□で表し、それと異なる場合には×印で示すこととした。た

だし、下り核の有無は違いとして取り上げなかった。また、一段活用動詞と形容詞の場合には活用形によって音節数が違うが、例えば、○●●●と○●●●●とは一致と見、○●●●●と○●●●●●とは不一致と見た。

(表 15) 現代東京方言における動詞・形容詞の各活用形のアクセント

二音節形容詞	動詞										終止連体	連用形	仮定形	未然形	命令形		
	三音節一段動詞					三音節四段動詞										二音節動詞	
	第二類		第一類		第三類		第二類		第一類							第二類	
語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体		
□	×	×	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□		
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□		
□	×	×	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□		
×	×	×	□	□	×	□	×	□	□	□	□	×	×	□	□		
	□ ×	□ ×	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□		

形 容 詞								
四音節形容詞			三音節形容詞					
第一類		第一類		第一類		第一類		
全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体	語幹	全体
□	□	□	□	□	□	□	□	□
×	×	□	□	×	×	□	□	□
×	×	×	□	×	×	×	□	□
×	×	□	□	×	×	□	□	×

従来から指摘されて来たように、全体として、各活用形のアクセントはかなりよく一致している。語の長さから見ると、語幹一音節の語は各活用形のアクセントが一致する傾向が強く、語幹が二音節以上である語の場合には異なるアクセントの活用形が多くなっている。これは、従来認められてきた語幹保持の傾向に一致している。第一類・第三類語の場合には、京阪式アクセントがもともともっていたところの、各活用形のアクセントがよく一致するという性質を継承したものである。それに対して、第二類の語の場合には、語頭の高低の逆転さえ含む大きな変化を遂げていながら、少音節語と動詞を中心に、活用形のアクセントがかなりよく一致している。その一致している活用形のアクセントを調べてみると、動詞の場合には連用形の影響を受けたとしか考えられない例があり、形容詞の場合には終止連体形の影響がかかわっていると見られる例があった。

しかし、ある活用形に生じたアクセントの形が他の活用形に影響を与えるという力は、それぞれの活用形の形がそれ



それにもった変化の原因と、相乗し、また、相克しながら、発現した。相克した場合には、後者の原因の方がより直接的であったりして、強いと、他の活用形にひかれるという変化は発現しなかった。他の活用形と異なるアクセントをもつこととなつている活用形のアクセントについては、その別の原因が説明できたように思われる。

変化は複雑であり、ある活用形に生じたアクセントが他の活用形のアクセントに影響を与えるという力は、絶対的に大きなものということではなかつたけれども、筆者の、動詞の場合には連用形から変化がはじまり、形容詞の場合には終止連体形から変化がはじまつたとする仮説が認められるならば、その力は確かに働いていたと考えられるのである。

動詞に比べると、形容詞の場合には各活用形のアクセントにばらつきが目立つが、それでも、近時の東京方言の若い層の形容詞のアクセントが各活用形で一致する方向に変化しているところを見ると、各活用形のアクセントを一致させるという力はやはり無視しえないものであると言えよう。

東京式アクセントでは、アクセント変化の結果、単純語と複合語との間に、語頭のアクセントの高低が一致するという、いわゆる金田一法則が成り立たなくなつていたために、語幹のアクセントを絶対に一定に保つておかなくてはならないという方言ではなくなつていたと見られるにもかかわらず、活用語の各活用形のアクセントは一致する方向に動いて来たし、今も動いていると言えそうである。

なお、東京方言について、第一類の語と第二類の語とを比べると、第一類の語の方が各活用形のアクセントをよく一致させており、第二類の語の方は一致率が低い。この事實は、音便の定着が直接の原因となつて、第二類の語にアクセントの変化が起きたことが、東京式アクセントを分離させた直接の原因であるとする筆者の解釈を支持しているように思われる。

注

(一) そのことについては国語学会平成五年度秋季大会において「母音優位・子音優位」と題して発表した。

- (2) 服部四郎「アクセントと方言」(『国語科学講座Ⅶ国語方言学』明治書院 一九三二・八) 六三頁。なお、二音節第二類動詞のうち、第一音節が無声化する語の場合、東京方言で、フク(吹く)ツク(付く)よりもフク・ツクの形で行われやすいことが注目されているが、この例も、筆者の解釈に立つと、東京式アクセントの変化が起きた時に、第一音節が無声化しているため、京阪式アクセントの形のままとどまったという可能性も考えられることになる。一旦、東京式アクセントで、フク・ツクに変わり、それが無声化が原因でフク・ツク形に変わった可能性もある。いずれの解釈が妥当であるのかは、無声化が、京阪式アクセントと東京式アクセントとで、それぞれ、いつ、どのくらい起きていたかが明らかにされる必要がある。
- (3) 金田一春彦『四座講式の研究』(三省堂 一九六四・三) 三七〇頁による。ただし、第二類連用形第二種のアクセントは秋永一枝「古今集声点本における一・二拍動詞のアクセント——古今集動詞のアクセント上——」(『国文学研究九七 一九八九・三二)による。
- (4) 金田一春彦監修秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典第二版』(三省堂 一九八一・四)による。以下現代東京方言のアクセントはこの辞典による。
- (5) 注3 金田一論文三五九頁。
- (6) 注5に同じ。
- (7) 打消の助動詞連体形「ヌ」のアクセントについては秋永一枝「古今集声点本の研究 研究篇下」(校倉書房 一九九一・二)二〇五頁による。また、推量の助動詞「ン(む)」のアクセントについては注3 金田一論文四七七頁による。
- (8) この変化の原因は川上葵「いわゆる低低型から高高低型への変化」(『音声学協会会報一八 一九六五・四)が論じたものである。それに筆者が便宜名前をつけた。
- (9) 拙著『室町時代語日本語音韻史』(武蔵野書院 一九九三・六) 九〇六頁で見たように、「ナイ」の「ナ」が打消の助動詞「ヌ」系に出るものと推定されるところからは、〇〇・の形であつて、その低ではじまる形をとどめているのかもしれない。
- (10) 音便が定着すると、例えば、ウゴイテ(動いて)のような形は、二音節第二類動詞の場合と同様に、特殊音節が単独でアクセントの山を担えない東京方言では、ウゴイテの形に変わらざるをえなかった。
- (11) 注3 金田一論文三七九頁。
- (12) 注11に同じ。
- (13) 注3 金田一論文三七三頁による。ただし、第二類連用形第二種のアクセントは注3 秋永論文七三頁による。
- (14) 注3 金田一論文四〇七頁による。ただし、第二類の連用形は、『類聚名義抄』に見えるところの上昇調の形が生きていたも

のと見た。

(15) 例えば、「良イ」について見ると、「ヨイイ」となり、東京方言では「ヨイ」に変わらざるをえなかつた。

(16) 注3 金田一論文四一六頁。

(17) 注7 秋永論文二〇頁も●●○と推定する。

(18) 注3 金田一論文四一九頁。